

五歳児の生活

ある一週間



守 永 英 子

この三月に五歳児を送り出して、過ごしてきた日々を、やっと
ふり返るゆとりを持てた今、子ども、この未知なるもの……と
しみじみ思いを新たにしている。二年間あるいは三年間育てた子
どもを送り出すこと三回。そしてなお、悩みや迷いの尽きぬこの
頃である。

以前五歳児を受け持った時の日誌を開いてみると、五、六月頃
には十二、三人から十五、六人のグループで、野球やリレーを楽
しんでいたようであるが、ことしの組は、一学期中二、三人から
四、五人の小グループに分かれて遊ぶことが多く、組全体の動き
に盛り上がってくるといった活動があまりみられなかった。

組を構成している子どもたちの性格にもよるものであろうか、

私の方からの働きかけで遊びはじめても、長続きしないで、すぐ
にバラバラになってしまふ傾向があった。

グループでの遊びが活気をおびてきたのは、やっと十月に入っ
てからのことである。このような傾向の組であったが、十二月に
入っての一週間をふり返ってみると、活動はかなり活発になっ
てきているように思われる。

十二月四日(月)

次第に寒い日が多くなるにつけ、子どもの活動も室内遊びの時
間がふえてくる。子どもたちは、いつも自由に作ったり、描いた
りしているが、時には、テーマをもった描画も新しい刺激とな
ると思い、今日は、『大きくなったらこんなことをしたい、こんな
ものになりたい』というテーマで絵をかくことにする。

「お友だちにはいしょね。絵をかいてしまっしてから教えてあげ
ることにしましょう」ということで、話したい気持ちを秘密にし
て、絵にぶつけさせたことは効果的だったようであった。いつも
より熱心にかいているようすがみられた。女兒では、ピアノの先
生、バレエの先生(教えているところや自分で演じているとこ
ろ)、看護婦さんなどが多く、学校の先生や食堂のウェイトレス、
南極探検船の船長などもあった。

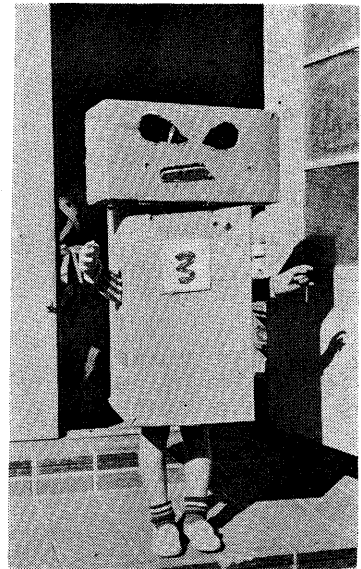
男児には、ジェット機のパイロットが最も人気があり、その

他、船長、自動車を作る工場の人、ロボットを作る科学者、ガンリンスタンド経営などさまざま。

かいたあとで、絵をみせながら、自分のしたいこと、なりたいたいものについて話をさせる。「大きくなったら看護婦さんになって、赤ちゃんのお世話をするの。今、おしめをかえてあげるところなの」というN子の説明にどっと笑い声がおきたり、「私が南極探検隊の船の船長さんで、〇〇ちゃんと〇〇ちゃんは船の人、〇〇ちゃんたちは送ってくれてるの」と仲よしのお友だちも計画の中に入れてしまっている。「女のくせに船長さんか」などという声に、話し手のはずかしそうなようすもかわいらしい。話す子どもも聞く子どもも楽しそうな顔……教師にとっても、楽しい活動であった。

組全体がまとまってする活動の時を除けば、あとは各自が、自分の意欲にまかせて、ひとりで、あるいは友だちといっしょに、大小さまざまな箱や紙などいろいろな材料で、ロボット、ひこうき、ピストル、ギター、家や家具、望遠鏡、花などいろいろなものを作ったり、自由画帳に絵をかいたり、レゴ、積木、ブロックキャップなどで作ったり、戸外で、リレー、野球、鬼ごっこ、砂遊びなどを楽しむ。

K男は大きなダンボールの箱を二つも使ってひとりでロボットを作っているし、F男は箱の底をぬいて色セロファンをはったも



数日かかってひとりでつくった
ダンボールの箱ロボット

のをいくつも重ねてはりつけテレビカメラを作っている最中、あとからI男、H男も参加しているようである。女兒は針金に色セロファンや七夕紙で花を作ってつけ、ヘアバンドを作っているのだという。誰かが作りはじめたのに刺激されて数人が次々と作りこくる。

入園当初、自分の時間や自由をもてあまし、すぐ家に帰りたいくなった子どもたちの面影は全くない。子どもたちは、自分の時間や自由を謳歌し、子どもたちの活動は果てしなく続く。

十二月五日（火）

ゆうぎ室にいく。歩いたり、スキップしたりを音の高さと結びつけて、高音の時は女兒、低音の時は男児、中くらいの時は全員

というようにきめておき、音の高低に従って交替にする。このような簡単な遊びを、子どもたちはよろこんでくり返し、自分がまっ先に音をききわけようと張り切ったり、遅れた時にはおかしそうに笑ったりする。

今日は『魔法つかい』のゆうぎをする。子どもたちは普段の遊びの中でも、魔法の杖を作って遊んだりするので大喜び。曲の三つの部分もよく聞きわけられ、魔法つかいが出てくるところが、魔法をかけるところ、かけられて相手がそのものになるところが、それぞれにつかめたようである。魔法がかけられるまで静かにしていた子どもたちの間に、魔法がかけられるところになると、期待にみちた笑いが思わずもれる。子どもたちは自分が魔法つかいになりたくて、何度もくり返してくれとせがむ。

ゆうぎ室から戻ると、卒業アルバムを表紙にとりかかる。何色もあるラシャ紙の中から自分の好きな色を選んで、ポスターカラーでかく。いつものようにかきたいという子どもからかきはじめたが、この絵を表紙にしてアルバムをつくり、みんなの写真をはって卒業の時にあげるのだと話すど、とても楽しみになったようで、「今日かかなかった人は明日でもいいの?」「ぼく何をかこくかな」などと積極的になってきたようであった。

数人ずつ、アルバムの表紙をかいている間にも、K男はロボット作りの続きをし、「前に番号をつけたんだよ」と考えている。

F男のテレビカメラはできあがり、お山にうつしにいくといつて、三、四人でかついで出ていった。花のヘアバンドを作ったA子が「舞台上で踊る人みたい」というので、「みんなでパレーしたら」というと、「だって私ならってないからできない」という。「いいじゃない、みんなで好きなように踊れば」というと、「じゃあ、U子ちゃんに先生になってもらおう」と庭に探しにいった。A子の提案が受け入れられたのか、何人かの女兒が、自分の作ったヘアバンドをとりききて、またいそいで庭に出ていった。こうして、前日のように、各自の活動は、自由に展開していく。

十二月六日(水)

アルバムの表紙の続きをする。「大きくなったら……」のテーマでかいた絵は、いろいろな表現があっっておもしろかったので、もう少しいろいろなものをかいてくれるかしらと思っただが、表紙ということで気持が改まってしまったのか、やはり、今まで何度もかきなれた船、ジェット機、女の子、花などに逃げてしまう人たちが多いのは残念だった。

水曜日の人形劇は、年少組もいっしょに、ゆうぎ室でカラーテレビをみる。「ねずみと王さま」は、子どもたちも興味をもってみているようだった。水曜日は十一時半までなので、子どもたちは「もうお帰り、はやいね」と遊び足りない顔で帰っていく。

十二月七日(木)

今日は実習日。幼稚園教員養成科の二年生も、二年の後半になると、自分で保育案をたて、ひとりで一日責任をもって保育することを学ぶ。

保育案

- 9:00 登園
自由遊び
- 9:45 絵画製作
(実物大の人間をかく)
- 10:45 音楽リズム
(木、風、落葉などの表現をす
る)
- 11:15 おはなし
「ライオンのめがね」
- 11:30 おべんとう
- 1:00 ハトポッポ体操
- 1:30 降園

「実物大の人間をかく」活動は、大きな紙の上にひとりをねかせて輪郭をとり、モデルをよくみてクレヨンで色をつけ、切りぬく。保育者は、観察する目と協力する気持を養うためにこの活動をとりあげたということであったが、参加したのは一部の子どもたちだけで、あまり盛り上がりせずに終わってしまった。担当者や他の観察者の感想は、「おとなが机上で立てた案と子どもとの気持とのずれを感じ、子どもの活動を本当にいきいきとしたものにするには、実にむずかしい、ということのようであった。」



パレーごっこ



パレーごっこ パレーをする人とテレビカメラマンと観客とパレーリーナを写せしめる人

十二月八日（金）

花のヘアバンドをつくる子どもは次々ふえてきたが、そのうちの何人かは、毎日頭につけては庭に出ていく。

どうも『子どもの家』が根城らしいので、行ってみると、「ワア！先生がきた、はずかしい」と大騒ぎ。「お客さまになるから入れて」と頼むとやっと許可がでた。U子が先生になって、あとの八人が横に並び、パレーリーナらしいおじぎのし方を練習している。ヘアバンドがすぐ落ちてしまうというので、ゴムをつけてあげる。

U子の指導で何度もおじぎをやりなおし、それがおもしろいらしいが、あまり発展しているようでもない。そこで「レコードをかけてあげるからお部屋でしたら」と誘ってみる。「いやだあ」という消極グループと、「そうしようか」という積極グループに分かれたが、結局、積極グループの声に従って部屋に戻る。

何枚かのレコードをかけてあげたが、子どもたちが気に入ったのは、ボンキエルの『時の踊り』とチャイコフスキーの『四羽の白鳥の踊り』の一部が収録されたもの。美しい軽快な感じが気に入ったのか、くり返しかけては、円になって両手をあげてキラキラさせたり、まわったりしていたが、何度もかけているうちに、『時の踊り』から『白鳥』に変わるところがわかったようで、

『白鳥』になると、円周の子どもたちは床に仰向けにねて足を円心にむけて交互にすばやく上下させ、ひとりには円心に立って両手をあげてまわるなどの型をとるようになってきた。



バレエを撮影中のテレビカメラ

部屋にいあわせた子どもたちは、自分の製作の続きをしながらバレエをみたり、いすをもってきて観客になりすましたり、テレビカメラのグループは、バレエを撮影するのだと隅に備えて色セロファンレンズをのぞく。M男は、自由画帳を出してきて「バレエしているところかこう」とかきだしたが、動くのでむずかし

いらしかった。はじめは、少しはすかしそうであったバレリーナたちも夢中になって、自分たちでレコードをかけなおしては、何度もくり返し踊った。

子どもたちの夢中になった輝いた顔——これが保育する者に与えられる最大の報酬かもしれないと思う。

十二月九日(土)

来週の誕生会のために、お菓子入れをつくる。いろいろとくふうをこらす子どももあるし、自信のある簡単なやり方で作ってしまおうとする子どももある。くふうした子どものを「ほら、○○ちゃんのことこのところよく考えたわね」などとみせてあげると、「ほんとは、ぼくももうちょっと考えてくる」とすなおにもうひとつくふうしようとする子どももある。

じょうず、へたはあっても、自分で考えくふうしようとする積極的な姿勢だけは共通のものであってほしいと思う。

☆ ☆ ☆ ☆

もう私の手もとから去ってしまった子どもたちに、もっと、ああもすればよかった、こうもすればよかったという思いは尽きない。私の力の足りなかったことをすまないとも思う。しかし、子どもたちは、きつと、それらをのりこえて成長していつてくれるにちがいない。